

論文内容要旨

論文題名 昭和大学附属烏山病院スーパー救急病棟における双極性障害に対する薬物療法の傾向

掲載雑誌名 Bipolar Disorder 第14巻 19-24頁 2016年

専攻名 内科系精神医学（昭和大学附属烏山病院）

氏名 笹森 大貴

内容要旨

双極性障害は頻度の高い精神疾患である一方、この疾患に対する薬物療法は十分に確立していない。本研究においては、精神科の急性期医療を担っている「スーパー救急病棟」（精神科救急入院料病棟）に入院した双極性障害を対象に薬物療法の動向について検討を行った。対象は、2010年1月から2013年12月に昭和大学附属烏山病院のスーパー救急病棟に入院した双極性障害の患者である。対象の診療録を後方視的に全数調査し、双極性障害に対する薬物療法について、入院時の初回処方、最終処方を調査、検討した。調査期間中にスーパー救急病棟に入院した患者総数は1899例、気分障害患者は440例であり、双極性障害はこのうちの221例であった。対象者の平均年齢は51.1歳で、患者全体の平均年齢46.9歳よりも高齢であった。スーパー救急運用基準に影響しない措置入院を除く3ヶ月以内の自宅退院率は全体が66.6%であったのに対し、双極性障害においては76.9%と全体を上回っていた。状態別に考えると躁状態において保護室の使用率が高くなっていた。入院時の処方は、気分安定薬が132例(59.7%)、抗精神病薬が169例(76.5%)、抗うつ薬79例(35.7%)であった。最終処方時には、気分安定薬が166例(75.1%)、抗精神病薬が184例(83.3%)、抗うつ薬が54例(24.4%)に処方されていた。スーパー救急病棟に入

院した双極性障害患者に対する薬物療法は、入院時から最終投与時にかけて抗精神病薬と気分安定薬の併用が増加し、気分安定薬よりも抗精神病薬の処方率が高率であった。入院時から最終投与時にかけて抗うつ薬の処方率が減っていた。入院前にはうつ病の診断であった患者が、入院後に双極性障害へ診断変更になったことが影響していると考えられた。